横浜市史資料室　City of Yokohama Municipal Archives Reference Room

市史通信

【目次】
●戦災・敗戦日記
●ある神中生の大正時代
●横浜の二宮金次郎像（一）
●閲覧資料紹介
『目にうつるものが
まことに美しいから
松本得三氏追想・遺稿集』
●市史資料室たより

焼跡のバラック　年不詳　場所は特定できないが、幾つものトタン屋根のバラックが並ぶ。
横浜の空襲と戦災関連資料（米空軍図書館所蔵）

第41号
【発行日】2021年7月7日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryo/

戦災・敗戦日記

今夏、「戦後横浜-それぞれの出発」というテーマで展示会を開催する。ここでいう戦後は、空襲から敗戦、占領に至る過程が集中する一九四五（昭和二〇）年と、その後数年程度を対象とする。それは、いわゆる「戦後」が、どのように始まったのかに関心の中心があるからである。

そのため、空襲被災から敗戦までの期間も、戦後の始まりという意味で取り上げる。被災後から始まった焼跡でのバラック暮らしは、敗戦・占領・接収を経て、様々な変遷をたどる。戦後の暮らしの出発点は、まさにそこにあったともいえるのである。

鈴木健治郎日記

展示では、いくつかの戦中・戦後の日記や資料を紹介する予定である。ここでは、当時神奈川県立工業学校生徒であった鈴木健治郎の日記（鈴木健治郎家資料）を取り上げる。

鈴木健治郎の被災状況については、『市史通信』の前号で紹介した。健治郎の日記は、日々の出来事が淡々と記されているのが特徴で、むしろそこに資料的価値を見ることができる。鈴木家は、当時松影町にあった。横浜中心部は疎開、避難した人も多く、被災から敗戦後までの一連の状況を示す記録は比較的少ないため、健治郎の日記は貴重な記録・証言といえる。

五月二九日朝、松影町一丁目の自宅から母と一緒に避難した健治郎は、派大岡川に逃れて助かった。爆撃が終わって、川から助け出され、焼け残った横浜国民学校へ避難した。屋上に上って見下ろすと、周辺は焼き尽くされ、自宅も焼失していた。

別れて山手に逃げていた母親とも再会し、やがて出勤していた父や姉とも避難先の山手の蓮光寺で再会を果たす。鈴木家は家族が皆無事だったので、翌三〇日から焼跡での生活を再開する。健治郎は、この日の日記に「仮小屋築造復旧の第一歩」と記している。

自宅の焼跡は相当熱を持ち、ガレキも多かった。そのなかでも「先づ防空壕の安否が僕等の死活を制する」と、まず防空壕の中の物品が無事かどうかを確認した。防空壕に水をかけて冷やしながら蓋を開けると、中の品物はなんとか無事だった。そこで、自宅跡にバラックを建てることにした。

ガレキを片付け、「三角形の骨組を作り、両側から、トタンを合わせ、釘づけした急造の小屋」であったが、それでも「住めば都で、再起の生活を始め」た。そして、「皆一様に焼けて見ると急に、近所の人と親しみが増して助けられたり助けたりを発揮し始めた。」と、町内の被災者同士一体感を持って焼跡での生活を始めたのである。

さらに、三一日には煉瓦でかまどを造り、自炊を始める。ただ、水道は近

鈴木健治郎の日記　1945(昭和20)年5月30日・31日
欄外にバラックの絵がある。　鈴木健治郎家資料

所のお宅の水道から少し漏れ出しているだけで不足していた。また、焼跡の倉庫から茶碗等は拾って来たが、箸は足りなかった。六月一日には、炊事場と便所を造った。此の間もガレキの片付を続け、また焚き木や焼け残ったコークスを拾い集めた。

焼跡での家の再建

そして、四日には早くも家の再建に向けて、材木を調達した。翌日、「旗竿にする竹もあったので、早速、国旗掲揚所を作った。」とあるのは興味深い。被災後とはいえ、まだ戦時中で、健治郎の父清三郎が町内会の役員であったからであろうか。この日、大工も依頼した。

七日、「久しぶりで市電へ乗った」が、一五日までは無料だという。八日は大詔奉戴日で、「国旗掲揚塔に国旗を高く掲げ」た。「はためく日の丸を見上げると、「戦災何ものぞ!」の気概が盛り上ってくる。」と、健治郎も珍しく感情を高ぶらせている。

ところで、五月二九日の空襲による松影町内会の死者は五一人だった。(『横浜の空襲と戦災　1体験記編』横浜市、一九七六年)。被災後町内の人々は、各自避難した者を除く一〇〇〇人程が山手の蓮光寺に避難していた。その後六月三日には町内会として、蓮光寺を引揚げて、元の土地にバラックを建て、あるいは防空壕を利用するなどして生活する方針を決定している。七日、隣組を再編し、一一日新しく役員を選び、清三郎が会長に選出された。

こうして、町内会・隣組の再整備を進め、人々が生活の再建に向かうなかで、鈴木家でも家の再建が始まる。大工が来て「本小屋」の建築が始まったのは、六月一五日だった。神奈川県立工業学校の生徒だった健治郎が書いた図面を元に、建築が進み、一七日には「建前が完成し」た。材料不足で、「最初の計画より小さくなったのは、残念だ」が、「着々と、家が出来て行くのを見ると、何かしら嬉しくなってくる。」(一九日)と、若者らしく素直な喜びも示している。

不足する材木などの材料探しも、父を中心に家族で続け、床張りも二〇日には完成し、翌日被災後から暮らした仮小屋を分解して、新しい家に移った。その後、窓や戸の取付け、物置も出来、二六日に一応本小屋は完成した。翌日二〇〇円の手間賃を大工に支払った。この日、防空壕の中から荷物を運び出して、家の中に運び入れた。そして、翌二八日一日がかりで荷物の整理を行い、当面の不要品は防空壕に戻した。

一応家もでき、空襲から一ヶ月経って、二九日から健治郎は、動員先の東芝小向工場への出勤を再開した。しかし、被災からの心身の疲れがたまっていたのか、七月三日急に発熱して一〇日程寝込み、その後も体調は戻らず欠勤が続いた。そして二八日、レントゲンの結果、肺浸潤と診断された。

その後は、自宅静養を続けて、日記に日々の空襲警報情報を記したり、町内会事務を手伝う一方、模型飛行機を作ったりして過ごしていた。八月一二日には、横浜松竹で映画と日本ニュースを見た。そんな中で、八月一五日の「大詔」を聞くことになる。

敗戦の不安

先の大詔奉戴日には、日の丸を見て、当時の軍国少年らしい感情の高ぶりを見せたが、健治郎の日記は、他の同世代、たとえば小黒英夫の日記(『市史通信』第三六号で紹介)などに比べ、軍国主義を礼賛する精神主義的な言葉はあまり見られない。

八月一五日の前、一〇日にソ連の対日宣戦布告を知った際には、「幾分、驚き、がっかりした。一層、頑張らねば勝利の日を見るのは不可能」と、軍隊も国民も自分自身をも、励ます言葉を記す一方で、「最悪の事態に陥るかもしれない」と、敗戦につながるかも知れないと冷静に分析している。実は前の日、保土谷化学の研究所に勤めている姉からソ連参戦の情報を聞いていたため、「予期しないこともなかったが」と、比較的落ち着いて新聞の報道を受け止めることができたようだ。

この翌日には、敵機が落としていったと母から聞いたビラを探して見つけた。ビラには原子爆弾について書かれていたらしく、「最近、人心がソ連の参戦と、新型爆弾とで、実に落着きを失ひ、動揺して来た。」と、客観的に情勢を分析している。さらに、一四日にも姉からの情報で、「情勢が緊迫して、最近では緊急御前会議が開かれて居て、降伏か?抗戦か?」が議論されていると聞き、「正に最悪の事態に陥った。」と記している。

健治郎にはすでに敗戦の予感があったのかもしれない。八月一五日、放送前に新聞屋が耳打ちした「降伏した」の言葉にも、「信ぜられない」、「絶対そん

な事が、あっては、ならない」と、反発は示していた。だが、ある程度客観的に情勢を判断する冷静さは保ちつつ、最悪の事態としての敗戦を不安の内に予感していたのであろう。

放送を聞いた後は、失望に加え混乱と虚脱感を感じながらも、「事、既に此、に至れば、唯忍苦以て国体護持し、国運を将来に開拓せんのみ。」と、現実を正面から受け止めている。つまり、敗戦にただ反発するばかりの軍国少年ではなかったといえる。ただ、どうしてよいかわからないというのも、正直な気持ちであった。三時頃やっと届いた新聞で「詳細を知り、又、原子爆弾の恐るべき威力を知り、増々迷ひ今後の処置に困窮する。」と記している。

山手から見下ろした松影町・石川町方面の焼跡　1945(昭和20)年9月5日
横浜の空襲と戦災関連資料(米空軍図書館所蔵)

敗戦後の始まり

こうして、混乱の内に敗戦後は始まるのである。一六日、久し振りに動員先の工場に出勤した。動員は解除となり、明日登校するように指示された。一六日の日記には、婦女子の疎開や、海軍が抗戦のビラをまいていたことなどが記されている。また、「危ないから、田舎へ引揚げ」ることを勧める知人もあり、鈴木家でも「田舎へ引越す計画を立て」た。

翌一七日、早速鈴木家では荷造りを始め、姉が行列に並んで、切符を購入した。健治郎は登校したが、次は二七日登校とのことであった。父親は残ることになり、健治郎と他の家族は荷物を持ってその日の午後、千葉の親戚に向かって出発した。そこには、末弟の武夫を疎開させていた。

末弟とも再会し、数日間田舎で過ごしたが、二一日には母親が父親と相談するために、いったん横浜に帰ることにした。翌日、健治郎も母に同行して、木更津から船で横浜に向かった。その日から天候が雨続きとなったこともあり、結局その後田舎には戻らなかった。

二七日、登校すると、神奈川県立工業学校は、空襲の被害を受けたため、第一高等女学校で授業を続けると聞いた。その日、三、四年は県庁へ行って勤労奉仕をすると言われ、県庁へ向かった。一一時頃から税関で作業を始め、午後には「一階の本箱に入っている書類を全部外に出し、掃除した」。「好きな物を持って行けと云うので、僕は、紙・箱・インク等を大量に持って来た。」という。

この作業は、連合国軍が進駐するに当たって、米軍が使用する建物を明け渡すための準備作業であった。税関には、米軍の司令部が入ることになっていた。「明日も、同じ所へ、八時半までに集合」することになっていたが、健治郎は翌二八日、再び発熱し、検査の結果九月一一日に腸チブスと診断され、翌日万治病院に入院した。

被災から、焼跡でのバラック暮らし、そして敗戦と、知らず知らずの内に健治郎の心身には、大きな負荷がかかっていたのだろう。一〇月一六日に退院するまで、一ヶ月以上の入院生活を送ることになった。しかも、この間に鈴木家にはさらなる困難が降りかかってきた。米軍が自宅一帯の土地を接収することになり、九月一七日に二四時間以内の立退きを求められたのである。

鈴木家の立退き・移転

そのとき、健治郎は家にいなかったが、「入院中外聞」の備忘録として、日記にこの間の経緯を簡略に書き残している。それによると、米軍の立退き命令を受けて鈴木家と町内の人々は、焼け残った町内のコンクリート造りの建物に荷物を移し、しばらく共同でアパート生活を続けた。元の家は分解して運んだという。

鈴木家では、父親が石川町に地所を見つけ、ここに改めて家を建てることにして、大工にも依頼した。ところが、二三日には一時身を寄せていた建物にも立退き命令が来て、鈴木家は未完成の新しい家に荷物を運び込まざるをえなかった。

一〇月一六日、健治郎が退院してきたときも、まだ家には大工が入っていた。リヤカーに乗せられて退院した健治郎は、「ぎっしりバラックの建てられた中の一偶の我家を見て、最初は、狭いので、淋しかったが、次第に、良い所が、わかって、嬉しくなった。やはり、自分の家が好い。」と、感想を述べている。この日も、大工が来て炊事場を造っていた。

「埋地には、すっかり、バラックは見られず　大建築に無数に点けられた電気がすばらしい。米軍の、ジープ・軍用トラック・水陸両用艇等が、ひっきりなしに、走り廻って居る。」と、入院中にすっかり様変わりしてしまった地域の占領風景を書き留めている。

一方、「電気が無くて不便だが、やはり、我家は、一番よい。」と、改めて感想を漏らしている。結局、鈴木家はこの石川町に落ち着くことになる。横浜市中心部の被災地のその後、接収され

た地域のその後、そしてそこに暮らす人々の歩みという意味で、たいへん興味深い経緯である。

被災後、町内のまとまりのなかで生活の再建を志した人々も、接収という事態によって、それぞれの道を歩むほかなくなった。鈴木家も、石川町の町内会に所属して新たな暮らしを始めることになるが、被災後の困難な状況の中互いの摩擦がなかったわけではない。一〇月二〇日には、「石川五丁目町会長の家で、隣組長の初顔合せがあったが、父が酒場へ行って不在の為に、母が代理で行ったので、少し嫌味を云はれたらしく、母は怒って居た。」ということもあった。

その直ぐ後には、「近く電気が引かれるさうだ。」とあるように、配給をはじめ町内の協力が不可欠な場面も多かった。電気は、一一月末に配線が引かれた（一一月二七日）後、ようやく一二月一一日に電灯がついた。一一月六日には、水道も開通した。

市民酒場

ところで、「父が酒場へ行って不在」とあるのは、何も飲みに行っていたわけではない。鈴木家は酒場の運営に関わっていたのである。健治郎の日記には、とくに戦後、酒場に関わる記述が散見される。これは、一九四四年に一般の酒場の多くが営業を禁止されるなか、配給制のもと公営の酒場として運営された国民酒場のことと思われる。横浜では市民酒場とも呼ばれ、日記でも両方の呼び方がされている。

横浜には昭和初期から組合運営の市民酒場があり、これは戦時中にできた公営の国民（市民）酒場とは一応別物であった。日記の記述だけからでは、この酒場がどちらの性格のものなのか特定できない。ただ、戦時中から戦後にかけての配給制度のもとでは、この両系統の酒場が一体化していたと思われる（『横濱市民酒場グルリと』二〇一五年、星羊社参照）。

鈴木家は、元々日本蕎麦屋上総屋を経営していたが、配給停止で休業し、当時父親は横浜興信銀行に勤務していた。五月二九日空襲の際には、平塚に集金に行っており、その後も時折夜の当直に行っていた。酒場は、元蕎麦屋の鈴木家を中心に、町内か有志によって運営されていたものと思われる。日記に「お菜の番」（一〇月二三日）とあるのは、酒のつまみを持ち回りで受け持って、自宅で作る当番のことのようだ。また、酒場を通して、様々な配給品を入手する役得もあった。

先の「入院中外聞」には、九月二三日の欄に「此の頃より、国民酒場が毎日の様にあり、酒・ビールが、入手出来るので、大工さん等に、やったり、物々交換用・売却等に使用して、父も気げんが好い様で、毎日飲む（よう）になった。」とある。

会社・工場に勤めていた人々は、職場での特配や増配があり、各家庭には大いに助けになった。その上、酒場の場合、飲食店であるだけに、当時としては珍しい食品が手に入ったようだ。たとえば、米国産のシリアルやHERSHEY'Sのチョコレート、ビン詰めのジャムやピーナッツバター、さらにキャンデーやチューインガムなどを、父親が酒場から家に持ち帰っている。

さらに、酒類の他にも業務用の特配があり、いわし・冷凍かれい・豆腐や、塩・醤油なども家庭用に分けてもらっていた。ところが、健治郎の日記は、年末に「来年から、酒場が個人営業となるらしい」（一二月一三日）と書いた後、翌年九月まで中断されて、酒場のその後はよくわからない。日記を再開した九月の八日には、「市民酒場の整理について会合」があり、母が出席したと書き、酒場に関する記述はそれで終わっている。

父の死

母親が代理で出席したのは、実はこの間に父親が亡くなっていたからであった。被災以来、家の再建や立退き、移転、町内会・隣組の仕事、酒場の運営と日々忙しく飛び回っていた父親は、家族のために相当無理を続けていたのだろう。一一月半ば頃から風邪気味だったらしく、一二月一日、酒場から昼頃帰って、「寒気がするからと云って、床を敷いて寝こん」でしまった。医者に診せて注射を打ってもらっても熱が下がらず、一九日には「今日は先生は、筋肉注射をしてくれて、これで下らねば、入院した方がよい」といわれるまで悪化していた。

この後健治郎の日記は途切れ、翌年九月に再開後も父親のことにはまったく触れないまま、最後の二二日に「父のお墓参りに行って来た。」と唐突に書いて、日記自体がその日で終わっている。健治郎が戦後残した記録によると、父親は二月に亡くなっていた。

父清三郎は、被災以来、材木をはじめ様々な資材・物品を自力で調達し、家の直しも自分でやった。敗戦後、家族が一時千葉の親戚に避難した際も一人残り、健治郎達が戻ると「父は、一人で、町内の事務を執り、敢闘して居てくれ」（八月二十二日）た。そして、戦後酒場が再開すると機嫌が良くなり、占領後の接収で立退きを迫られても、直ぐに移転先を見つけてくるなど、困難にもくじけなかった。

さらに、移った先の石川町でも町内会・隣組の仕事をこなし、「進駐軍の焼跡整理に伴ふ家屋立退に依る損害調書」を書いて、区役所へ提出する（一〇月三日）など、家族のために労を惜しまなかった。被災後半年間、父清三郎は奮闘したが、その間の心労や体力の消耗など、想像以上の負担が清三郎の心身にかかっていたのだろう。

そうした父の思いを受け止めて、健治郎は、体調を戻して翌年神奈川県立工業学校に復帰して学業に励むのである。

（羽田博昭）

ある神中生の大正時代

横浜市史資料室所蔵の小野昭子家資料には、五点の大正後半から昭和初期の日記が含まれている。うち四点は、一九〇二（明治三五）年一一月、小野条次郎四男として生まれた専三の日記である。専三は、戸部小から一六（大正五）年に神中（神奈川県立第一横浜中学校）に入学している。

ここでは、残っている最初の一九一九（大正八）年九月、神中三年在籍中から進学する二四年四月頃について紹介していく。この時期は第一次大戦末期から関東大震災を挟んだ頃で、内容は身辺雑記、感想の外、時事問題や災害など様々であった。尚、関東大震災と復興については別に紹介したい。

※神中は、一八九七（明治三〇）年に神奈川県尋常中学校として創立し、一九一三（大正二）年、四回目の改称で神奈川県立第一横浜中学校となり、二三（大正一二）年、神奈川県立横浜第一中学校に改称している。当時の所在地は、現在の西区藤棚町二丁目である。

神中生活

最初の日記は一九年九月六日、「本日より学校第二学期開始」から始まる。学校生活では、授業内容の記載は殆ど無く、主に試験と行事などが記載され、また休暇の娯楽なども記されている。その他、市内の大きなできごと、家や親戚の動向、また新聞情報が主であるが時事的な事項も記されている。

一九二〇（大正九）年四月六日には「本日より第四学年始業、例によりて西川先生の長たらしい訓話あり、其要領は一年生に入った時の我等上級生の覚悟が挫けはせぬかとくだらもないことを取止めもなく一時間も話した、然し先生の話に耳を貸せば我心は化せられて過去の反省、未来の覚悟を考へるを禁ずる能はず、最後に話した勤勉ト服従に付いて話されし事が身にしみた」と記している。これは、前年度進級ができなかった事からの感想であろう。

また、同年の二学期初頭には、西川先生訓話か校長所感の中で「今年度の官立学校入試験に対し一高志望二十四名ノ中僅に二名、之に反し横須賀中学ハ六名なり、其他他官立学校入学者は四年修了者（五年生）総計僅に七名なりと、悲しき次第ならずや」（20／09／06）と語られた事も記している。

当時の校長の木村繁四郎は、札幌農学校卒業後、岡山や宇都宮の中学で教え、神中創立と共に招聘され、一八九九年に二代目の校長に就任していた。木村校長については、「幾何の補充に校長さんが来て英語の書取練習をしたが、旧式な発音て早いので一同大弱り」（20／02／06）との記載もある。神中は外国人教員がおり、当時、帰化した教員の安藤英富（フーパー）は「国際音声字母」を教えていたという（百年史資料編三〇二頁）。これら外国人教員との違いに戸惑ったようである。

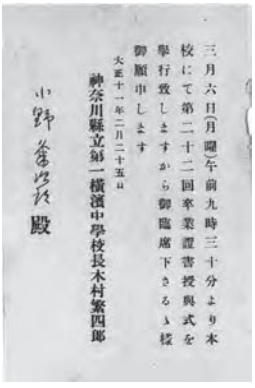
三月六日（月曜）午前九時三十分より本校にて第二十二回卒業證書授與式を擧行致しますから御臨席下さる様御願申します
大正十一年二月二十五日
神奈川縣立第一横濱中學校長木村繁四郎
小野條次郎殿

写真１ 卒業証書授与式通知
小野昭子家資料24-31

安藤英富は、「英語教師英人安藤先生送別式挙行、先生は日本に滞在せし事三十有余年、優に日本語を話す、先生は英国に残す両親ある由にて両親の健在なる中に一度帰る希望を漸く実現したるなり、我等の先生を失へるは甚残念なり」（21／04／27）と二一年に退職している。その後、「今日始業式に際し前学期退校したクローリーの後任としてクレバート云ふ米人を紹介されたり、先生の父母は日本ニ四十年も居住し居れと」（21／09／06）と替わった。

専三は六年間在籍し、二二（大正一一）年三月に卒業を迎えた。「卒業式、知事の来駕訓辞あり、本年は二十二回なり、卒業生八十四名、三十五番の成績にて卒業す、六ヶ年間の長き月日師とせし友とせし学舎を去るに当り感慨無量、重荷の一端を減するを得た、望は永遠なり」（03／06）と記す。この後、直ぐに入学試験が待っていた。

学校行事

学校行事では毎年の卒業式や学期ごとの始業式などの記載が多いが、変わった行事では、大雪が積もると雪中行軍することが記されている。「今朝見れば積雪実に六寸五分、学校にては例年の如く岡野公園に雪中行軍を行ふ、程土ヶ谷之泥濘には病まされたり、午後より事業休み」（20／02／09）、「起きて見ると驚いた、積雪優に二尺五寸、当地方にては近時稀の大雪なりと、又此雪は北海道より九州に来る地一帯降れりと云ふ、例に依り雪中行軍、岡野公園豊顕寺へと、痛快〳〵」（21／02／04）、「昨日降雪あって今日は先日に等しい位積った、例によって学校では岡野公園豊顕寺方面に雪中行軍を行った、授業一時間にて後は雪中行軍をサボッテ家へ帰った」（22／01／19）と毎年のように行われている。

また四年生の時には、発火演習が行われている。「本日四五年にて茅ヶ崎藤沢にて発火対抗演習を挙行し、午前中は大した事なく、午後は逃げるので我級は後衛■（尖）兵となり悪戦苦闘し敵を散々苦しめたり、弾丸は一人廿発づゝ、苦しかったけれ共愉快だった、矢張り学校で練習するよりも散兵線等は真直と皆真面目である」（20／11／25）と発火演習の様子を記している。

同じく四年では静岡方面の旅行があったが、「本日は四学年級の静岡方面旅行にて僕も行く筈であったが医者が止せと命じたので残念ながら行くことを諦めた、他ノ諸君の為めに晴れ給へ」（20／05／13）と体調不良のために参加出来なかった。

また、学校行事ではないが、横浜貿

易新報社主催マラソン大会の結果に一喜一憂している。一九年は「本日は貿易新聞主催県下中等学校マラソン競争（競走）にて、柏尾に応援に行く、本年は月桂冠は我神中にあり、塚田の一着を始め、五、六、八着と五人の中四人迄十番以内に入りたるは痛快ならずや」（19／11／09）と優勝し、一五日には「本日貿易マラソン選手慰労会の茶話会あり」と茶話会が行われた。しかし翌年は「本日貿易新聞主催県中等学マラソン競争（競走）挙行セラレ遺憾ながら成績不良たり、昨年は一着の栄冠を得たれとも今年は僅二十三番」（20／11／07）、翌年も「貿易新聞社主催県下中等学校マラソン競争（競走）あり、応援兼運動にて戸塚駅まで徒歩す、我選手の成績は他校に対して甚だ遜色ある」（21／11／06）との結果であった。

試験の悲喜こもごも

試験は科目だけの記載が多いが、いくつか出来映えについての記載もある。たとえば「本日物理の試験突然あり、然し相当（九十点位）に出来たり」（19／09／29）のように良かった場合、一方で「物理試験、六ヶ敷て非常に困った」（20／03／05）、「七月十五日、早昨日を以て試験終了、〔略〕第一学の試験は第一日が良かったが二日目ニ於て失敗せり」（20／07／15）、「幾何全敗忘るな、此日の屈辱を」（20／12／06）、「復々代数失敗、思ひ遣らるゝ三学期、我同類項盛に乱暴狼藉しその鬱憤をはらす」（21／02／19）、「代数試験、益々危険、同級生の顔色無し」（21／02／21）のように悪かった場合や、また「幾何試験問題の不公平を憤る」（20／06／29）のように何らかの不公平に対する不満も記載されている。

進学

先述のように進級出来なかった年があったので、四年時の卒業式では、「卒業式挙行、井上知事臨場栄を得。此日同胞を送るを見我を思へば聊か感あり。本日の知事の祝詞の一部に才者才を恃むは失敗の基、勇者愚を知るは成功の基と」（21／03／07）と記している。

翌卒業年は東京商科大学（現一橋大学）を受験している。出願は二月で「商科大学へ願書届出に行く、八時五分の汽車にて行き九時半頃到着したら既に百七十五人届済にて百七十六番なり」（22／02／13）と出遅れた感を持っていた。入試は「三月二十一日より三日間商科大学入学試験、試験英数漢作西洋史」であった。この結果発表は三月三〇日にあり、「商大成績発表、不幸にも敗北、必勝を期して臨んだにも拘らず不幸失敗に了った、今少しの努力をと思ふが既に最善を尽したから運とあきらめる外なりし、失望甚しく」となり、「浪人」することとなった。

「浪人」生活一年目、在学中と同様にバザーに出掛けたり、花火を見たり、海水浴に行ったりと余り変わらない生活をしているように見える。しかし、八月には「夜伊勢佐木町へ散歩に行く、市中に白線帽其他の学生の散歩せるを見るも羨し、多分帰省せし者なり」（08／01）と記し、秋には「午後より東京へ行く、予備校の件」（22／09／13）、「早十月に入った、三月迄半歳足らず、奮闘努力心願を期せざる可からず」と次第に受験モードとなっている。翌二三年「三月十八日より二十四日迄商大試験」であったが、「商大又々不合格噫々。一年間の努力も水泡に帰した、然し又来る年もと初志を貫徹せる」（23／03／30）との結果に終わった。

二年目は四月早々「夜伊勢佐木町へ行く、遇々志村氏に遇ふ、氏は仙台二高へ合格、竹内は慶応に合格、ひとりわれ取り残されたり、今晩此話を聞きての感を永久に忘るな」（04／07）となり、五月には「今日より予備校通ふ」（05／01）としている。一方、米独立記念日の花火や友人との海水浴にも出掛けている。同年は九月に関東大震災に見舞われ、後半は震災関係の記載が多い。この年度は「商大」を受験せず、翌年「四月二十七、八日、早大専門部試験」（23／04）と早稲田大学専門部を受験し、「三十日、発表、漸く合格」（23／04）となった。

徴兵検査

二二（大正一一）年は二十歳となるので五月に徴兵検査となった。

「愈々徴兵検査、今日より成人なり、壱乙と決定され意外の感なり、来月三日抽籤にて入営か否か決定される、希くば当らざることを」（05／18）と徴兵検査によって「成人」となったと記す。結果は第一乙種合格となったが、これには「意外の感」との感想で、抽籤には当たらないように望んでいる。この抽籤は六月三日であったが、「先日施行された徴兵検査抽選日遅刻の為不明」とあり、結果は記されていないが、一一月には「本日入営者出立す、余も若し合格であったら本日入営するのだが幸か不幸か不合格の為入営免除せられた」（11／30）と希望通りであった。

娯楽に勤しむ

試験や進学は大変であったが、一方で前にも触れたように、様々な娯楽に勤しんでいる。

春には「曾て約束し居きし杉田の観梅に是幸と出掛けたり、歩めば全身汗となり木陰恋し、然れ共梅花は未だ三分咲きにて早し、彼の有名なる三百年を経たりと云はるゝ玉簾梅は今が盛なり、岡村天満宮は未だ早し」（21／02／27）、「午後より掃部山へ花見に行く、花に浮かれ人の数甚しく桜花は満開の本に弁当を開き度る花見気分漲れり、これより公園へと行く、此処は又野球狂にて一ぱい見る事も出きず」（20／04／18）と梅や桜の花見に行っている。

夏には、何回も海水浴に出掛けている。二〇年は雨続きで記載が無いが、二一年では「今年になりて初めて海水浴に行く、日曜なる上に酷暑なる故海水

浴場は芋を洗ふが如し」(08／07)とあり、九日にもまた出掛けている。「浪人」中の二二年には七回海水浴に出掛けている。また二〇年八月には兄に連れられて東京見物に行き、東京海上ビルディングで眺望を楽しんだり、東京帝室博物館でミイラなどを見学したり、浅草や靖國神社なども巡っている。二一年八月には、兄の辰・巳之亮と共に甲斐御嶽山に登山に行っている。

秋には「本日は祭日なれば之を利用して高尾に紅葉狩す、八王子に着きたる頃雨となり雨を冒して行く、雨外套(レインコート)ダケ着て頭より濡鼠となりたり、紅葉は真盛であったので愉快だった」(20／11／23)と紅葉狩りもしている。また菊花も見に出掛けており、「川和の中山恒三郎家の菊を観に行く、開花迄にはまだ数日早し、東京日々谷(ママ)、横浜野沢屋の菊に比すれば数に於ても種類に於ても出来栄に於ても劣れり」(22／11／06)と川和の中山家に出掛けており、一方で「野沢屋別荘も雑草茂り菊畠は留守番の野菜畑ニ化し富豪の末路あはれなり、一句「廃屋(スタレヤ)の庭に淋びし乱れ菊」」(同／11／04)と野沢屋別荘の「今」も記している。

また、寺社の祭礼や縁日等にも出掛けており、二〇年では「伊勢山の本祭」(05／15)、浅間神社(浅間町)の「二十五座とか云ふ神楽」(06／03)や、八月の根岸の榊祭りでは、「午後より根岸の榊祭に行く、潮時は六時半なので榊御輿が海に入った、榊御輿は四畳半位の角に榊を束ね高さ壱間半位数十人にて担ひ、もみ〳〵海に入るのである。其言葉は「今日はあって明日は無ぞ」と。真先に点火せるに高張提灯行き、多くのものが御輿に綱を付け引きて沖に出すのであるが、仲々出ればことて早背は立たず泳ぎて御輿につかまりもんで〳〵で御輿の頭が一尺位ニなった所で引き返へすのであるが、往きと同様大騒ぎ、それより復担ぎて八幡宮へ行くのだが、労れて居て思ふ様ニならず、又ももみ〳〵して宮に至った頃は早日も暮れ暗くなった頃で、目出度手を拍って宮に参詣し思ひ思ひの事につけり、男らしき祭は横浜の一名物と言ふ」(08／15)と祭の様子を詳細に記している。この数日後には、地元の杉山神社の祭りがあり、二日目に「茶番を見に行きたれども驟雨襲ひ来る為蛇目傘に高下駄に見物」(08／20)、三日目には「されども雨を突きて神社ニ参詣すれば商売店を連ね相当の人出なり、六丁目より順次巡り見れば傘をさして余興を見物せり、三日間共雨なれば神官はさぞ愚痴をこぼしたることなるべし」(08／21)と記している。

横浜のできごと・時事的できごと

時事的なことや横浜における出来事も記録されている。これらの多くは新聞からの情報に依っているようである。

時事的なことでは、普選問題や東京市電のストライキは何回も記載され、大隈重信・山縣有朋の訃報、原敬の暗殺などが記されている。東京市電のストでは「帝都の面目地に墜ちたる東京市の迷惑如何ぞや、従業員は帝都市民を敵とし飽くまで己が意志を撒(ママ)さんとせり此悪むべきや」(20／04／25)との感想を記している。

市内のことでは、「本日横浜電車従業員手当増加運動の為ストライキを起し午後三時より運転中止となり市中混雑を致し車夫暴利を貪れり」(19／11／14)と横浜電気鉄道のストによる人力車の「暴利」について記し、「本日突然七十四銀行休業し為に市内各銀行は取付けに合ひ、毎(後)に左右田銀行は預金者正午頃より押寄せ老女男は我勝に争ひ女の悲鳴起り突然地獄の阿修羅場の如しと云ふ。茂木家も早や全滅せんとす、整理中なれ共結果如何、今迄横浜に於て第一と称せられし富豪の栄華も早や昨日の夢と消えさるを思へば他人事なりと雖、其心中を察すれば■(感)無量なり」(20／05／24)と七十四銀行の休業を記している。なお、父粂次郎は同行本店雇員であり、「七四銀行興信銀行と改名し整理付き行員減しに付き父も其一人となる、父は二十八年七十四銀行に忠勤せり」(21／01／25)となった。

また二〇年、ロシアのニコラエフスクで起きたパルチザンによる多くの日本人も含む住民殺傷事件(尼港事件)では、「忘るな、五月廿四日の夜十二時、露国ニコライエフスクニ於ケル邦人七百名ハ石田領事ヲ初メ一小児ニ至ル迄惨逆(虐)ナルバルチザンノ為ニ捕へられ皇軍の援を持(待)ちつゝ、遂ニ藩(蕃)刀ノ露ト消へたノデアル、有支(史)以来ノ大耻辱デアル」(20／05／24)と憤っていた。

その他、この頃は新聞紙面に飛行機や飛行船の記事が多くあり、一九年一〇月飛行郵便の成功、二〇年三月所沢京城間飛行、山縣豊太郎・奈良寅男の墜落死などにも触れている。

パンデミック

一九一八年～二〇年にかけて、全世界でインフルエンザ(流行性感冒、以下、流感と約す)が大流行し、日本でも多くの死者を出している。横浜市でも一八年～一九年と一九年～二〇年にかけての二度の大流行において、推計約一三万人が罹患し、約二七〇〇人が死亡している(『大正七、八年大正八、九年流行性感冒流行誌』、神奈川県警察部衛生課、一九二〇)。

日記には、二〇年初頭の二度目の大流行について、いくつかの記述がある。一月は「正月になって風引が多／外出頻繁の為めと夜更しの結果」(横浜貿易新報20／01／06)との状態であり、マスク・うがい・消毒等が奨励された。

先ず一〇日には「放課後寒稽古に付きて注意あり」とあり、流感の明示は無いが、前年一月の流行に際しては、放課後二時間などの指示が出されており(百年史資料編)、恐らく同様であったのであろう。一二日には「本日県より学校に医師出張し流行性感冒予防注射を行ふ為ニ事(授)業時間三時間潰る」と

あり予防注射を行っている。当時、インフルエンザウイルスは確認されてなく、「パイフェル氏菌」が病原とされワクチンが作られている(『流行性感冒流行誌』)。この予防注射のために翌日は寒稽古を休んでいる。横浜市では、県から注射液の無償配布を受け、一〇〇名の医師に嘱託し、衛生組合を通じて広く予防注射を行うと報道されており(横貿01／13)、一九日には「母、予防注射の為か昨日より床に就く」との記載があり、家族も予防注射を接種している。

一六日には「流行性感冒の為死亡せる者多く、今日のみにて四十人なり」、二六日には「流行性感冒猛威を振ひ昨日の死亡者八十三人の中五十八人は流感の為斃れたり」とあり、死者数の報道を記している。『横浜貿易新報』でも、一九日「流行感冒で沈黙した横浜市」、二一日「流行感冒の死亡者／一日に六十五名」(神奈川県)、二五日「万治病院開放／昨日より感冒患者収容／児童の発病多き小学校では向ふ一週間授業三時間を短縮」、二七日「万治病院は本日から／一般流感患者を実費で収容す」・「小学校へ再注意／児童患者三千九百名／二校より死者三名を出す」、二月一日「死亡率は異例なり／二〇五パアセント／流感益々悪化」等と報道され、一月下旬～二月上旬がピークとなった。二三日には神中四年生一人が亡くなっており、三学期の欠席者は多かったという(百年史資料編一一八頁)。

二月半ばになりようやく終息に向かい、一四日の報道では「小学校授業時間復活／流感漸く下火」(横貿)となり、日記にも二月になると流感の記載は見られなくなった。

陸軍大演習

神奈川県などで行われた二一年一一月の陸軍大演習では、実際に見たことも含めて詳しく記載している。

初日の一六日には「今大演習に陛下の御名代として東宮殿下には大本営なる神奈川県庁に行啓あらせられ軍隊を統監あらせらる」ので、「東宮奉迎の為授業半日」となった。翌々日には、晩に起きて辻堂方面に見に行ったが、風により波が高く西軍の海からの部隊が上陸できず中止となっている。この日の夜には「殿下の旅情を御慰め申す為県市主催の下に小学校中学校青年団の合同大提灯行列あり、畏くも殿下には大本営の二階の窓際に佇まれて熱誠こめたる万歳に御答礼遊ばされたのには感泣せざるを得なかった」と記している。四日目は、「殿下には今晩は露営に明晩は東京に還御の為、我々は最後の奉送をなし御名残り惜しく感じた」と記し、また「昨日演習見学の機を失ったゝめ友達八名と最後の決戦を玉川畔に見んと夜十時横浜駅着、川崎より徒歩にて丸子を過ぎ二子に至る道は垣々たる大道にして観覧者絶ゆる暇なく月光惨(ママ)として昔ながらに照す、二時頃丸子に着く」と夜に出掛け、「寒気厳しく外套を被り河原に火を起して寒さを凌がんとすれど燃すべき材なし、二時！三時！時移るに随いて寒気益々加はる、小銃の音折々に寒空に轟く、四時五時空は白んで来た、群集は堤に蝟集した、烽しが挙かる、飛行機より照明弾を投下す、夜は全く明け離れた今時頃先づ東軍より発砲し大砲小銃機関銃殷々として天地に轟く、愈々戦闘開始、統監部の審判官が馳せ付ける歩兵か来り飛行機が飛ぶ、愈々演習気分漲る、歩兵の徒渉、見物して居ても寒きに水を渉るとは見るだに寒く且憐まざるを得ない、殊に騎兵の襲撃に一等の見物だった、馬か人か人か馬か砂塵濛々とした壮観は都会にては見ること能はず」と記し、「帰りは渋谷迄徒歩東京より汽車にて帰る、午後三時」と翌日午後の帰宅となった。

写真2 東軍酒匂川附近ノ防戦　11月17日
(絵葉書・市史資料室所蔵資料564)

また、一九年一〇月に房州沖で行われた海軍大演習についても、御召艦摂津に西波止場から乗艦する大正天皇を「当市中等学校及小学校は奉迎したり、横浜駅前及桜木駅前には大緑門の装置あり、陛下には午前十時十分横浜駅着輦、陛下には天皇式海軍服を召されたり」(10／23)と奉迎に参加している。また、直後の二八日に行われた観艦式でも、「午後八時四十分横浜駅御着輦、西波止場より御召艦摂津に乗御、其より全艦隊を御親閲にならせられたり。市民は雨にも臆せず奉迎し、沿道に堵列し欣々然たり市中の雑踏甚し、然し雨の為ニ港外に陣勢を整へる百数十隻の艨艟の雄姿の見ること能はざるは惜しむ可し」と記している。

＊　＊　＊　＊　＊

日記は、年々記載が少なくなり、日付が飛び飛びになってくるが、学校生活や地域のこと、その時々の考えていることなど、ここに紹介した事以外も含め様々なことが記載されている。

【参考文献】
『神中・神高・希望ヶ丘高校百年史』歴史編・『同』資料編(百周年記念事業合同実行委員会)一九九九年。
【引用　小野専三日記】
「大正八年九月六日　日誌」(小野昭子家資料83-4-2)、「大正九年正月吉日起　日記」(同83-4-1)。引用は常用漢字体に改め、句読点を付し、日付は(　)に20／01／01のように記載し、年を省略した場合がある。「小野昭子家資料」は『横浜市史資料所在目録　近・現代』第10集、二〇〇一年を参照。

(百瀬敏夫)

横浜の二宮金次郎像（一）

はじめに

現在、私達の生活は、不安の中にある。二〇〇〇年代に顕在化した格差と貧困による「生きづらさ」の問題は現在も改善されておらず、むしろ深刻化しているからである。非正規雇用の拡大によって平均賃金が伸び悩む反面、物価はじりじりと上がり、食料品や日用品などは同価格でもサイズが小さくなりはじめている（シュリンクフレーション）。また消費増税やビニール袋有料化による細かな支出が以前より増えており、ここにコロナ禍による社会混乱や経済不況も重なって、今後の生活に不安を覚えざるを得ないのである。

生活が苦しく、先行きがみえないとき、近代日本に生きた人びとは勤勉・倹約・謙譲・孝行などの生活規範（通俗道徳）をもとに当面の困難を乗り越えようとしてきた。真面目に働き、贅沢や無駄な出費を抑えて何とかやりくりする。また家族や親戚、ご近所さんと助け合いながら生きていく。そうした日常規範にもとづく実践を通して、よりよい生活を目指そうとしたのである。

もとより生活問題は時々の政治・経済・社会状況の影響を強く受けるものであり、個人の努力による改善の余地はさほど大きくない。しかし、先のような実践を重ねれば、結果として富や幸福を得ることが出来ると信じられてきたのである。ただしこうした発想は、通俗道徳の実践と富や幸福という結果を接合・癒着させているだけに、現実に成功した人を道徳的に擁護し、逆に貧乏で不幸な人は自己責任として道徳からも排除されてしまうワナのような側面を持っていた。ここから生活向上のための努力が、支配秩序の安定にからめとられるという皮肉な状況も生まれることになる（安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』青木書店、一九七四年、松沢裕作『生きづらい明治社会』岩波ジュニア新書、二〇一八年）。

一方、近代日本の道徳意識は小学校の教育を通しても形成された。戦前の日本では学校教育を通して、庶民でも勉学に励み続ければ立身出世を実現できるとの観念が形成された。その枠組みに最も適合的な人物とされたのが二宮尊徳であった。特に昭和期には薪を背負って読書する幼少期の彼をかたどった二宮金次郎像が各地の学校に建てられた（ただし別の構図をとる二宮金次郎像も存在した【写真一】）。近年では「歩きスマホ」の影響から好ましくないとの意見もあるが、寸暇を惜しんで学びを重ねる二宮金次郎の姿は、人びとの立身出世への願いと共に記憶されてきた。こうして立身出世の観念を下から支えたものを、見田宗介は〈金次郎主義〉と呼んでいた（『現代日本の心情と心理』筑摩書房、一九七一年）。

その痕跡は、現在でも各地の学校で確認できる。神奈川県土地家屋調査士会の調査によれば、二〇一〇年現在神奈川県下の約八六〇の公立小学校のうち、一四五校に二宮金次郎像があり、横浜市内にも三七校に金次郎像があるという（『金次郎MAP』、二〇一〇年）。同年の横浜市内の小学校は合計三四五校であるので、十校に一つは校内に二宮金次郎像があったことになる（『横浜市立学校名簿』二〇一〇年度）。それではどのようにして市内の各校に二宮金次郎の像が建てられたのだろうか。今回は先行研究や『横浜市教育史』（下巻、一八二～一八八頁）、『横浜市史Ⅱ』（第一巻上、一一七三～八〇頁）の記述を踏まえつつ、一九三〇年代に各校に二宮金次郎像が建てられるまでの過程を整理しよう。

【写真1】二宮尊徳先生ノ銅像（岡野小学校）

一、二宮尊徳と報徳運動

二宮金次郎像のモデルである二宮尊徳は一七八七年七月二三日、相模国足柄上郡栢山村（現・小田原市栢山）に生まれた。十四歳で父を、一六歳で母を亡くし、伯父の家に預けられたという。また同時期には酒匂川の氾濫で自家の田畑が全て流され、土地にかかる年貢の弁済のために全ての家財を売却した。【写真一】は、病身の父にかわって金次郎が村の共同作業の人足を務めた際、若年の微力を補うために草鞋を配った説話にもとづく像である。

こうした境遇の中で二宮尊徳は農業に尽力するかたわら、荒地に菜種を植え、廃田に苗を植えて復興するなどの努力を重ね、父が手放した土地を買い戻しながら二十歳で生家を復興した。またそれ以降も田畑を購入しては小作に出し、小地主となった。一八一二年、二六歳の時に小田原藩の家老である服部家に奉公し、一八一八年に同家の財政再建を引き受けてこれに成功した。一八二一年にはその手腕が認められ、小田原藩主の分家である宇津木家の下野国桜町領の調査と復興に一八三七年まで従事した（桜町仕法）。ここで二宮尊徳は荒廃した農村の復興に成功し、そのための諸施策は報徳仕法と称されることになる。彼はその後も各地で農村復興の施策を行い、一八四二年には幕臣として登用され、利根川分水路工事の調査に従事した。一八四五年には日光領の仕法を発案して五三年から委託され、一家を挙げて移住したが五六

年に数え年七〇歳で逝去した。

二宮尊徳は江戸時代末期に活躍した農政家であり、藩主や幕府の委託を受けて、支配者・経営者の立場から農村復興のための施策を重ねた人物であった。彼の編み出した報徳仕法の内容は多岐にわたるが、その基本は至誠・勤労・分度・推譲といわれる。真心を持って誠実に自分の働きを重ねることで所得を上げ、また支出に上限をかけてその範囲で運用し（分度）、そこから生まれる余剰を自分の子孫や他人に譲る（推譲）というものであった。

二宮尊徳のもとにはその仕法に学ぼうと多くの人が弟子となったが、彼等は尊徳の死後もそれぞれの立場で報徳仕法を引き継いでいった。報徳仕法には幕府や藩などの公権力が主体となって実施される行政的仕法と、武士・町民・農民などの仲間同士で自治的に仕法が行われる結社的仕法とがあるが、明治以降は後者の仕法が広く展開された。この運動は小田原藩の領地であった西相模地域出身の指導者によってはじまり、各地に報徳社という互助組織が結成され、相互扶助と生活改善をはかる運動が模索された。報徳社は日露戦争後に展開された地方改良運動の担い手として拡大し、一九二四年には各地の報徳社が統合して大日本報徳社となった。こうして報徳仕法を引き継ぐ運動が、近代以降にも展開されたのである（『国史大事典』「二宮尊徳」「報徳仕法」「報徳運動」より摘記。早田旅人『近代西相模の報徳運動』夢工房、二〇一三年、大藤修『人物叢書　二宮尊徳』吉川弘文館、二〇一五年も参照）。

二、修身教育と二宮金次郎

二宮尊徳の生涯は明治期には伝記になり、「篤実温良にして人心を動かすに足るものあり」とされた。一八五六年、二宮尊徳の高弟であり、相馬藩で報徳仕法を実践した富田高慶が『報徳記』という伝記を残したが、これが一八八〇年に旧相馬藩主の相馬篤胤によって清書され、天皇に献上された。明治天皇は小さな二宮金次郎の銅像を座右に置いたという。また宮内庁は『報徳記』を政府・行政関係者に印刷・配布した。この中で二宮尊徳は一八九一年に従四位を贈られた。一八九四年には神奈川県の小田原、一八九七年には栃木県の今市に報徳二宮神社が創立された。

そして二宮尊徳の幼少期の説話は道徳教育に組み込まれた。二宮金次郎は修身教育が国定教科書となった一九〇四年、小学三年の教科書に登場し、忠義・孝行・勤勉・自営の徳目を代表する人物とされた。修身教科書は一九四五年までに五回改訂されたが、金次郎少年は一貫して登場した。また一九一一年には唱歌「二宮金次郎」が尋常二年の音楽教科書に掲載されている。

このように二宮尊徳が学校教育にとりあげられた理由は、彼が貧しい農民の出自でありながら艱難辛苦をこえて社会に尽くした人物であり、国民の模範になり得るとされたからである（藤森照信「二宮金次郎像の生涯」『東京路上博物誌』鹿島出版会、一九八七年、井上章一『ノスタルジック・アイドル　二宮金次郎』、新宿書房、一九八九年）。

生前の二宮尊徳は藩主にも分度と推譲を説き、その地域の支配者に「仁政」を求めたが、明治の学校教育では幼少期の刻苦勉励の姿勢が注目された。現代風に言えば、尊徳自身は共助や公助も含めた提言や実践をしたのに対し、修身教育では幼少期の自助の部分が取り上げられたのである。

また一八九一年には『報徳記』をもとにした幸田露伴の伝記『二宮尊徳翁』に「負薪読書」の口絵が掲載された。また『報徳記』では薪を採る際に書を懐に入れて「誦した」とされていたが、『二宮尊徳翁』では薪を負い「歩みながら読む」と書きかえている。岩井茂樹によれば負薪読書のモチーフの源流は中国の「朱買臣図」にあり、『二宮尊徳翁』の口絵を書いた人物もこれを手本にしたという（『日本人の肖像　二宮金次郎』角川学芸出版、二〇一〇年）。こうして生まれた二宮金次郎の「負薪読書」の図は当時の広告チラシ「引き札」に利用されて拡散し、金次郎像が建てられる素地を形成していくのである。

【表1】『横浜市事務報告書』にみる二宮金次郎像の寄付

	寄付された品名	価格	寄付を受けた学校（現）	寄付年月日
1	二宮金次郎先生石像	231円50銭	神奈川小学校	1933年12月　1日
2	二宮尊徳先生幼時銅像	400円	蒔田中学校（旧：蒔田小学校）	1935年　7月23日
3	二宮尊徳先生幼時銅像	500円	瀧頭小学校	1935年10月20日
4	二宮尊徳先生形像	180円	大鳥小学校	1935年10月　4日
5	二宮尊徳先生幼時銅像	250円	稲荷台小学校	1935年　9月22日
6	二宮尊徳先生幼時勤勉ノ像	150円	戸部小学校	1935年10月19日
7	二宮尊徳先生幼時勤勉ノ像	150円	神橋小学校	1935年11月　1日
8	二宮尊徳先生幼時勤勉ノ像	390円	宮谷小学校	1935年11月　1日
9	二宮尊徳先生幼時ノ像	380円	南吉田小学校（旧：寿小学校）	1935年10月19日
10	二宮尊徳先生幼時勤勉ノ像	150円	西中学校（旧：西戸部小学校）	1935年10月　4日
11	二宮尊徳先生幼時ノ像	185円	東小学校	1935年10月15日
12	二宮尊徳先生幼児勤勉ノ像	320円	峯小学校	1935年10月30日
13	二宮先生銅像	500円	岡野中学校（旧：岡野小学校）	1936年12月16日
14	二宮尊徳先生幼時勤勉之像	75円	川島小学校	1937年　4月15日
15	二宮尊徳先生幼時之像	388円	南太田小学校	1937年　4月17日
16	二宮尊徳先生幼時勤勉之像	270円	横浜吉田中学校（旧：吉田小学校）	1937年　6月26日
17	二宮金二郎先生木像	100円	西前小学校	1938年　4月20日
18	二宮尊徳先生石像	624円	日枝小学校	1938年　6月　8日

出典：『横浜市事務報告書』1934・35・37・38年度の「教育課　経理に関する件」より作成

三、二宮金次郎像の建立

日本の学校に二宮金次郎の像が建ちはじめたのは、一九二〇年代以降である。そのはじまりは一九二四年、愛知県豊橋市の前芝小学校で、地元の名士が報徳運動に傾倒する中で石像を寄付したものだが、この石像はビクのようなものを背負っており、「負薪読書」ではない。一方、一九二八年には神戸の篤志家が勤勉貯蓄と勉学精神鼓吹のために二宮尊徳の銅像を造り、神奈川県の桜井小学校および報徳二宮神社、神戸・明石両市の各校などの八十三箇所に寄贈したという。薪を背負いながら読書する二宮金次郎像が建てられたのはこれを契機とする(前掲『東京路上博物誌』、『ノスタルジック・アイドル二宮金次郎』および松尾公就「二宮金次郎像の変遷と「応召(徴)」」『昭和の暮らし研究』第四号、二〇〇六年)。

【表2】『横浜貿易新報』にみる二宮金次郎像の建立

	見出し	学校(現)	記事の年月日
1	けふ除幕式をあげる　二宮金次郎の銅像	戸塚小学校	1930年　7月23日
2	蘆穂崎の校庭に　尊徳翁の銅像	鶴見小学校	1931年10月27日
3	学童の勤労から尊徳像生る	城郷小学校	1933年12月14日
4	浦島校に立つ　尊徳翁の木造	浦島小学校	1934年11月22日
5	此処にも尊徳像　銀紙と古新聞で	蒔田小学校	1935年　6月14日
6	蒔田校尊徳像除幕式　生徒の努力成る	蒔田小学校	1935年　7月22日
7	尊徳翁像除幕式　中里村谷本校で	谷本小学校	1935年　7月22日
8	開校十五年に尊徳像　中川校の寿ぎ	岡津小学校	1936年10月　8日
9	山元小学校の尊徳像除幕式	山元小学校	1936年11月11日
10	中和田校庭に　尊徳翁銅像建設	中和田小学校	1937年11月　2日
11	尊徳像除幕式	新田小学校	1937年　8月31日

ある記事では神奈川県で「尊徳翁像が初めて建てられたのは横浜平沼校」で、一九三一年秋に建った「尊徳先生幼時の像」は「無言のうちに報徳の調べを数万の児童に説いてきた」という(『読売新聞神奈川版』、一九四一年一一月七日)。県下では先述の桜井小学校(現・小田原市)や一九三〇年一月の岡本小学校(現・南足柄市)、七月の戸塚小学校(当時は鎌倉郡戸塚町)の事例があるものの、横浜では平沼小学校が最も早い事例となる。同校では毎月二十日を報徳日として銅像への敬礼や唱歌「二宮金次郎」合唱、職員の講話を行っていた。また一〇月二〇日を「報徳祭」として式典や展覧会などを開いていた。さらに「勤労・分度・推譲の実行週間」を設け、「分度貯金」や「廃物利用励行」を定めていた(『ヒラヌマ』創刊記念号、平沼小学校、一九三六年)。

【表1】は『横浜市事務報告書』から確認できる市内各校での二宮金次郎像の設立日時である。一九三三年から三八年までに一八の学校で二宮金次郎像が建てられている。表には一九三六年度の記載がないが、この年度にも「二宮尊徳先生幼時勤勉ノ像他二十余点」の寄付記録があり、金次郎像の建立・寄付があったと推測される。また【表2】は『横浜貿易新報』に掲載された金次郎像建立関係の記事である。さらに九校での建立を確認できる。

これら各校の金次郎像は生徒たちの浄財を集めて建てられたものであった。銀紙や空き瓶を収集し、あるいは各自のお小遣いを節約して募金を集め、そこに後援会や父母会からの募金を加えて建立の準備を進めたのである。その意味で、金次郎像が建つという事実そのものが子供たちや地域の人の努力や苦労を物語るものといえるだろう。

この他に横浜では一九三一年九月に肖像画の学校を営む人物から肖像画を学校に寄付したいとの申し出があったため、二宮尊徳を指定して市内六十五校にその肖像画を配布した(『横浜貿易新報』、一九三一年九月二三日)。また二宮尊徳の生誕一五〇年となる一九三五年七月二三日から没後八〇周年を迎える一〇月二〇日までの間に、全市六七校に報徳会を組織するよう指示していた(『横浜貿易新報』一九三五年七月一日)。さらに横浜貿易新報社は一九三五年一〇月に二宮尊徳の懸賞作文を募集し、その優秀作品を同紙に掲載した(『横浜貿易新報』一九三五年一〇月一〇・一一・一三・一五・一九・二〇日)。

このように二宮金次郎像が建立した一九三〇年代は、世界恐慌などの不景気と農村の困窮問題が意識され、「自力更生」を求める政策が実施された時期であった。この中で勤倹力行の象徴として二宮金次郎が注目されたのである。

ところが一九四一年以降には戦争の長期化と物資不足による金属類の回収がはじまり、学校にある二宮金次郎の銅像も供出対象とされた。横浜でも供出が行われ、ある学校では供出された銅像のかわりに石像が寄贈されたという(『神奈川新聞』、一九四三年六月五日)。現存する二宮金次郎像の多くが石像であるのは、戦時下の銅像の供出が関係しているといえよう。

おわりに

今回は学校に二宮金次郎像が建てられるまでの背景として、二宮尊徳の生涯と報徳運動の展開、学校教育における二宮金次郎イメージの形成を概観し、横浜における金次郎像の建立の基本情報を整理した。二宮尊徳の生涯と二宮金次郎のイメージには若干のずれがあり、各校に建てられた金次郎像は後者を基本にしたものであった。

それでは各校に建てられた二宮金次郎像は、具体的にはどのようなねらいと準備のもとに建てられたのだろうか。またその準備に参加した子どもたちはどのような思いを持ったのだろうか。次回は二宮金次郎像建立に関する学校記事や児童作文を検討することで、これらの疑問に応えることにしたい。

(金耿昊)

閲覧資料紹介
『目にうつるものがまことに美しいから　松本得三氏追想・遺稿集』

『目にうつるものがまことに美しいから　松本得三氏追想・遺稿集』は、一九八一年に逝去した同氏をしのぶ書籍である。

松本得三氏は一九一五年に愛知県に生まれ、名古屋の第八高等学校を経て京都大学法学部を卒業し、一九三九年に朝日新聞社に入社。一九四一年に徴兵によって満州に駐屯し、シベリア抑留を経て一九四七年に帰還したのち朝日新聞社に復職し、一九六九年まで同社で活動した。横浜市には一九六九年一二月に参与として入庁。翌年に都市科学研究室長となり、『市民生活白書横浜と私』（一九七一年）、『市民生活白書　私の横浜』（一九七四年）、『調査季報』第二六～四六号等の編集にあたり、一九七六年一一月に飛鳥田市長からの要請を受けて相模原市長選に立候補するために退職した。しかし、一九七七年一月の相模原市長選に落選。また一九七九年から体調不良で病院に通い、一九八〇年一月からガンの闘病生活に入り、翌年七月一〇日に逝去した。

松本得三氏は飛鳥田市政のブレーンの一人であり、横浜での革新自治体の模索やその実態を内側から見つめ続けた人物であった。彼の問題意識は「市役所は市民の問題をどこまで市民の立場で考えることができるか」であり、横浜時代に執筆した論考は『言葉と自治体』（一九八〇年）として刊行されている。徹底して現場の声に耳を傾ける彼の姿勢は多くの人びとの敬意を集め、横浜市在職時にも彼を中心とするグループが形成され、そのつながりは「松本学校」と呼ばれたという。

二九三頁の本書は松本得三氏を追慕する近親・知友・弟子などの筆による追悼文と本人の遺稿・論文集からなり、これに彼の年譜と弔意・弔電の一覧および編集後記が収録されている。

追想文は学生時代（五名）、朝日時代（三〇名）、横浜時代（一四名）、晩年（一二名）と区分され、合計六一名の回想・追悼文が収録されている。彼自身の生涯の歩みが隣人との関係においてどのようなものだったかをうかがうことができる。後半の遺稿・論文集は、朝日時代（四編）、横浜時代（五編）、晩年（三編）である。横浜時代の論考は四編が『言葉と自治体』にあるが、未収録のものもある。

本書は松本得三氏の歩みや人物像を知る上で重要な資料である。ただし関係者のみに配布されたものであるためか、国立国会図書館に所蔵がある他は閲覧の難しい資料でもある。そこで、田村明資料（刊本）にあるものを利用できるようにした。原本の状態を考慮して複製になるが、本資料室で請求すれば閲覧・複写することができる。

（金耿昊）

《市史資料室たより》

【令和３年度横浜市史資料室展示会】
「戦後横浜－それぞれの出発」

会期：７月15日（木）～９月23日（木・祝）
会場：横浜市西区老松町１番地
　　横浜市中央図書館地下１階
　　ホール前ホワイエ及び市史資料室展示コーナー
時間：午前９時30分～午後５時
　　◎入場無料
内容：空襲被災から敗戦を経て、連合国軍による占領・接収が始まった1945（昭和20）年とその後を中心に戦後横浜の出発を、市民一人一人の視点から紹介します。

【展示関連講座】　《事前申込制》
「戦中戦後の日記を読む」

開催日時：９月11日（土）午後２時～４時30分
会場：横浜市中央図書館地下１階ホール
募集人数：50人（応募者多数の場合は抽選）
参加無料
応募方法：往復はがきに応募者の氏名・住所、電話番号を明記の上、宛先にお送りください。（はがき１枚につき２人まで）
締め切り：８月31日（火）必着
宛先：〒220-0032横浜市西区老松町１
横浜市中央図書館地下１階横浜市史資料室
＊講座で手話通訳を希望される場合は、締切日までに横浜市史資料室へご連絡ください。
Tel 045-251-3260　Fax 045-251-7321
eメール so-sisiriyou@city.yokohama.jp

【寄贈資料】

1.根本政視様　根本千賀子家資料追加　５件
2.竹内春男様　竹内春男家資料追加　１点
3.長谷部信彦様
　長谷部信彦家資料追加　３件
4.川上桂司様　川上桂司家資料追加　12件
5.五大路子様　五大路子資料　351件
6.小松郁夫様
　明治前期測量２万分１フランス式彩色地図（復刻版）　１件
7.高橋富美子様
　高橋富美子家資料追加　317件
8.中村宇一郎様　中村宇一郎資料　39件
9.平田真理子様
　平田真理子家資料追加　11件

【横浜市史資料室のご利用について】

現在横浜市史資料室の利用は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため予約制となっております。事前に電話・ｅメール等で利用方法等をご相談ください。
※マスクの着用、手指の消毒にご協力をお願いいたします。

◇ 休 室 日 の 御 案 内 ◇

毎週日曜日及び
横浜市中央図書館休館日
（８月10日、９月21日、
10月11日、11月15日）

＊訂正＊

『市史通信』第40号　４頁２段６行
誤　つては添付 → 正　ついては添付

◆『市史通信』の編集は、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団が行っています。

リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可